

「無関心性」概念から考えるフェミニスト美学

石川 茉耶 (早稲田大学)

本発表は、フェミニズム的観点から美学を見た際に生じる問題点、とくに、フェミニストによる「無関心性」概念の理解をたどっていき、こうした見方の先に何が求められているのか、フェミニスト美学(Feminist Aesthetics)の将来性を考えることを目的とする。

何を美しいとみなすのか、どのような根拠に基づけば普遍的な美を語ることが許されるのか——こうした問いを根本的に支えている(18世紀にはじまる)理論にこそ、無意識のジェンダーバイアスが隠されているとフェミニストは結論づけており、とりわけ「無関心性」の定義が確立したために生じた問題点を追及することは、1990年代以降のフェミニスト美学の主要テーマの一つであった。このように、従来美学における概念理解を社会的視点から批判的に解釈していく作業は、けっして新しいことではないが、一方で、こうした批判を再検討することではじめて、これから先のフェミニスト美学の展望を考えることが可能になると発表者は考える。したがって本発表では、フェミニストによる「無関心性」概念理解を出発点とする。

はじめに、「無関心性」の定義がなぜジェンダーバイアスを含んでいるといえるのか、代表的なコースマイヤー (2004)の論究をみる。コースマイヤーは、カントやショーペンハウアーを題材に、美的な判断(とその対象である美)に、「無関心性」という基準が設けられたことによって、特定の立場からの視点をあたかも人間全体の本性であるかのように見せてしまう危険があると述べている。「無関心性」が「男性のまなざし(The Male Gaze)」の絶対化につながるとする議論をもとに、パースペクティヴィズムとの関連を考察する。

さらに本発表では、以上のような課題が明らかになったその先に何が要求されているのかを考える。まず、従来美的経験や判断を乗り越えるために提示されているアプローチをみていく(例えば、「無関心性」概念が含むジェンダーバイアスを認めつつ、一定の無関心的立場を担保しつつも、関心を排除しない仕方での、美との新たな対峙方法を提案するブランドなどがあげられる)。なかでも、近年のフェミニズムに求められていることとして、従来伝統的哲学規範の問題点を批判的に取り上げるだけでなく、よりポジティブな側面から新たなフェミニズム的テーマを探すことを掲げるイトン(2008)の主張に着目する。これまで哲学的に語られることの少なかったテーマ(例えば、ファッションや料理など)をフェミニズムの観点から分析していくことに、どのような展望

が見出せるのか、それが「男性的」「女性的」二項対立の際限なき拡張に陥る危険性がないのかなどをふまえて、これからのフェミニスト美学の在り方を考察したい。